六通貝塚貝層範囲確認調査

宮　城　孝　之

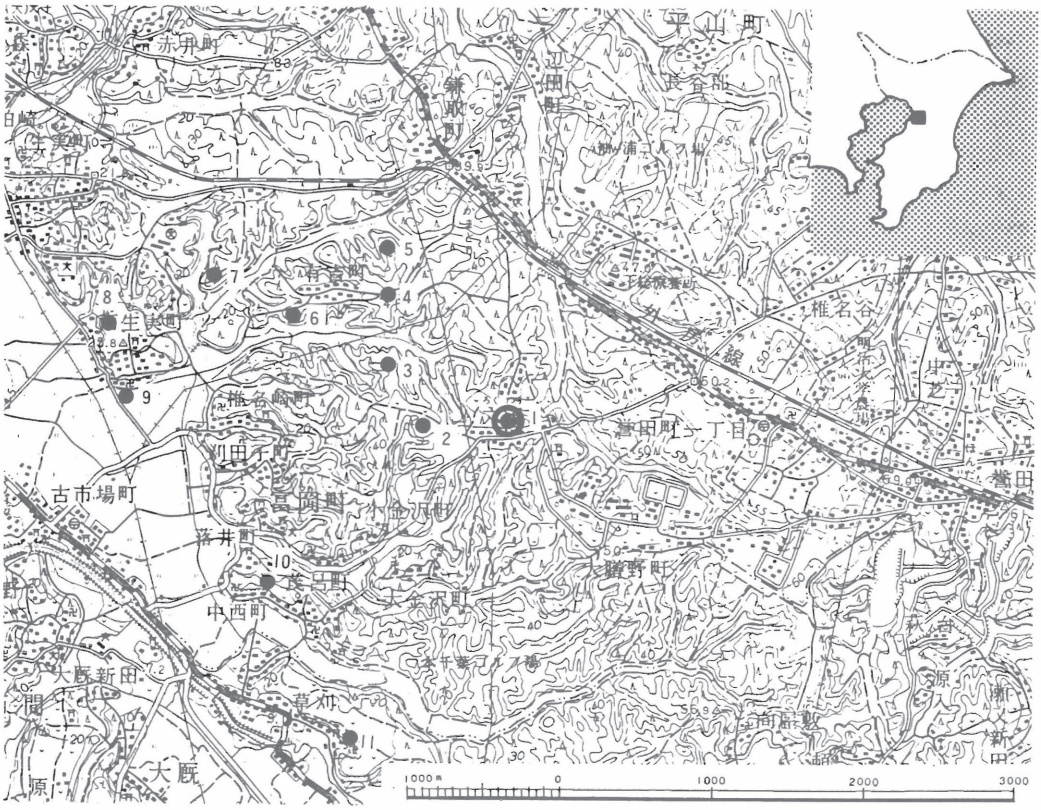
1．はじめに

ここに報告する六通貝塚は，千葉市小金沢町に所在している。現在，この貝塚の周辺は，住宅・都市整備公団による千葉東南部地区の大規模な土地区画整理事業の一環として造成工事が進められている。今回行った貝層範囲確認調査は，六通貝塚に隣接する地区の造成工事に先立ち，貝層の堆積範囲を正確に把握することを目的として行ったボーリング調査である。調査は昭和61年３月に実施した。

本報は，ボーリング調査によって判明した六通貝塚の規模と現況について記すとともに，調査の際に採集した遺物と地主の方々が所蔵しておられる遺物について若干の紹介を行いたい。

2．六通貝塚の位置と環境

千葉市と市原市の境を流れる村田川は，台地を複雑に開析する支谷をあつめ，東京湾にそそいでいる。この村田川の北岸には，古くから知られている千葉市貝塚町貝塚群と同様に，多くの貝塚が密集している。六通貝塚はこの村田川北岸の貝塚群の中でも内陸に位置しており，千葉市生実町と同市椎名崎町との間を谷口とする通称イズミ谷津と呼ばれる小支谷の最奥部にあたる。この



1．六通貝塚　2．小金沢貝塚　3．木戸作貝塚　4．有吉南貝塚　5．有吉北貝塚　6．大井戸作貝塚
7．上赤塚貝塚　8．森台貝塚　9．浜野川遺跡　10．杉ノ台貝塚　11草刈貝塚

第１図　六通貝塚と周辺のおもな貝塚（千葉1/50,000）

貝塚が所在する台地にはイズミ谷津のほか，北東側からは都川から分かれる仁戸名支谷が，また南側には村田川の支谷である大金沢支谷の末端が入り込んでおり，分水嶺となっている。

台地の標高は40m～47mを測り，各支谷へと続く斜面はいたって緩やかである。第1図に示した村田川北岸のおもな貝塚における地形的環境と比べた場合，ひとり六通貝塚のみが著しくその環境を異にしている。少なくとも六通貝塚をのぞく周辺の貝塚には，何らかのかたちで支谷に面する急峻な斜面が認められ，それらの支谷が東京湾岸での漁撈・採集活動の主要な通路となっていたであろうことは明らかである。しかし，六通貝塚については，分水嶺にあたる台地に位置するため，東京湾岸での漁撈・採取活動の主要な出入口となったと考えられる支谷は，にわかには特定できない。たぶんイズミ谷津乃至は大金沢支谷が使われたのではないかと思われるが，この点については詳細な検討を要する。

六通貝塚についての初見は明治15年の「古器物見聞の記」(註1)であろう。貝塚を訪れた加部厳夫は，貝層を掘って若干の遺物を得ている。この時，加部が持ち帰ったと思われる土偶は高橋健自の『考古学』(註2)で再び紹介されている。

昭和24年7月には東京大学人類学教室によって貝層部の発掘が行われている。この調査の報告はその後出されていないため詳細は不明だが，石鏃や打製石斧，石皿，敲石，石棒，石剣，独鈷石などの石器が出土しているほか，人骨と甕棺が発見されたという(註3)。発掘調査によるものではないが，昭和29年に貝塚の中央を南北に通る道路が新設された際，北側の貝層の部分から人骨が発見されたという(註4)。これについても詳細は不明である。

昭和43年に行われた東南部丘陵地帯の遺跡分布調査によっても遺物が採集されている(註5)。この時採集された土器には，堀之内Ⅰ式・Ⅱ式，加曽利BⅠ・Ⅱ・Ⅲ式，曽谷式，安行Ⅰ・Ⅱ式，安行Ⅲa式などが含まれており，このうち堀之内式及び加曽利B式が圧倒的に多かったという。この他に石鏃，スクレーパー，滑石製装身具などが，貝塚の南側の畑から採集されている。

貝塚周辺部の調査としては，昭和53年に千葉県文化財センターによる六通遺跡の調査がある(註6)。貝塚の北西部にあたる隣接地で，検出された縄文時代の遺構は極めて少なく，加曽利B式期と推定される住居址が2軒検出されたにすぎない。この調査によって六通貝塚の貝層形成に直接関与したと思われる集落の限界が明らかとなった。

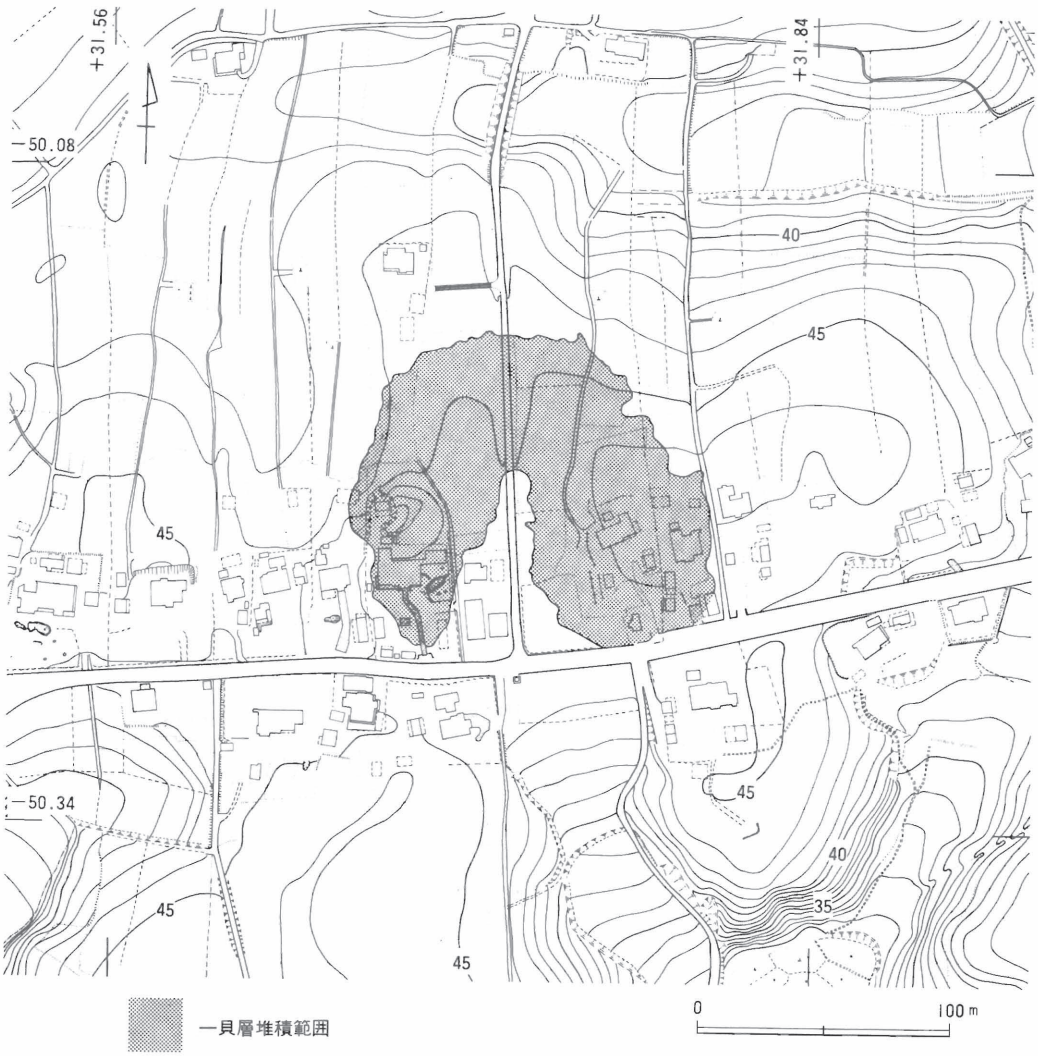
現在までに報告されている六通貝塚の貝類は，ハマグリ，シオフキ，アカニシ，キサゴ，カガミガイなどの鹹水産の貝類である。貝層部の調査がほとんど行われていないことから報告されている貝の種類は極めて貧弱である。

六通貝塚周辺のその他の貝塚について若干ふれてみると，最も近い貝塚として小金沢貝塚があげられよう(註7)。六通貝塚からは直線距離にしてわずか500mの位置である。この貝塚は直径約90mの点列環状貝塚で，イボキサゴ・ハマグリを主体とする鹹水産の貝類からなり，貝層は後期の堀之内式期に集中的に形成されたものである。さらにこの貝塚から北西500mの位置に木戸作貝塚(註8)があり，小金沢貝塚と同じく，直径約60mの点列環状貝塚をなしている。貝層はイボキサゴを主体とする鹹水産の貝類からなり，貝層の形成時期は堀之内式期である。この他，高沢支谷に面して縄文時代後期を主体とする上赤塚貝塚，中期を主体とする有吉北貝塚(註9)，中・後期と思われる有吉南貝塚(註10)，同じく中・後期とされ，すでに消滅している大井戸作貝塚(註11)などが点在し，村田川北岸の貝塚群を形成している。また，高沢支谷の谷口にあたる浜野川遺跡において，昨年度縄文時代前期の貝塚が水田の下から発見されている(註12)。

以上，おもな貝塚についてふれてみたが，これら以外の貝塚をふくめても今のところ縄文時代晩期まで継続して貝層が形成されたと思われる貝塚は，村田川北岸ではこの六通貝塚のほかにはなく，時期的には極めて貴重な貝塚と言えるであろう。

3．調査の方法と結果

調査には，長さ1mのボーリング棒を使用した。貝層の範囲を確認するため，特に堆積貝層の縁辺部を中心にボーリングを行い，あわせて貝塚周辺部の広範囲にわたるボーリングを行っている。調



第2図　六通貝塚貝層堆積範囲（1：3,000）

査対象面積は約40,000m²におよぶ。調査によって判明した堆積貝層の範囲は，公共座標による測量杭を使用し，平板測量を行って500分の1の原図を作成した。

ボーリング調査の結果，堆積する貝層の範囲は第2図に示した東西約140 m，南北約125 mの大規模な馬蹄形を呈することが判明した。貝層の巾は50m～70m内外で，堆積貝層のない馬蹄形の中心部は，20mにも満たない狭小な場所となっている。真南に向かって開口部があり，大金沢支谷の末端が緩やかな斜面となって入り込んでいる。貝塚の中央に立つと，貝層部分が若干の高まりを見せ，中央は多少の窪地となって南の支谷へとつづいていく観を呈する。貝層の遺存が比較的よいのは，北側半分の畑と梅林となっている部分で，1m以上の貝層の堆積があると思われる。貝層の中央にはボーリング棒をさすことができないほどの純貝層の堆積が認められる。一方，南側半分の宅地にあたる部分に関しても，表面では貝層が認められないものの盛土の下に依然貝層が存在していることが確認された。

周辺部も広い範囲でボーリング調査を行っているが，小規模な点在貝塚の存在は確認されていない(註13)。

貝層を構成している貝類は圧倒的にハマグリ，イボキサゴが多い。その他，シオフキ，カガミガ

イ，アカニシ，オキシジミ，カキ，バイガイ，サルボウ，ウミニナ，アラムシロなどが認められた。

調査中に採集された土器片は，細片が多く，拓影図として掲げられるものはほとんどない。時期の判別できる例では，堀之内Ⅰ式，加曽利ＢⅠ・Ⅱ式，安行Ⅰ・Ⅱ式，安行Ⅲａ・Ⅲｃ式などがあり，安行Ⅲｃ式は今回はじめて確認された。最も多く採集されたものは，加曽利ＢⅠ式から安行Ⅱ式までの土器片である。土器片の散布は，貝層外縁部から外側へ20ｍ前後までの狭い範囲に限られており，宅地や道路による人為的な影響も受けていると思われる。調査中に採集されたその他の遺物は，石鏃１点と土偶の脚部１点である。

なお，堆積貝層の西側にあたる部分に古墳が１基あり，周囲の貝層を盛土として使用している。この古墳は六通古墳群の１つと考えられ，７世紀代の古墳と推定される。

４．貝塚出土の遺物

本貝塚から今までに出土している遺物について拾ってみると，堀之内Ⅰ・Ⅱ式，加曽利ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ式，安行Ⅰ・Ⅱ式，安行Ⅲａ式の各土器，打製石斧・石皿・敲石・石鏃・石剣・独鈷石・石棒などの石器や土偶，滑石製装身具，異形台付土器などである。しかし，土器や石器が図示され，形態を知り得るものは数少ない。昭和43年に行われた遺跡分布調査の際に採集された遺物が『千葉市史史料編1』(註14)の中で若干紹介されているほか，異形台付土器について米田耕之助（註15）が紹介している程度である。

今回の調査によって採集された遺物は少なく，土器は小片が多いため，ここでは割愛させていただく。図示した資料は調査中に採集された土偶と地主の方々が所蔵しておられる異形台付土器，独鈷石，磨製石斧などである。

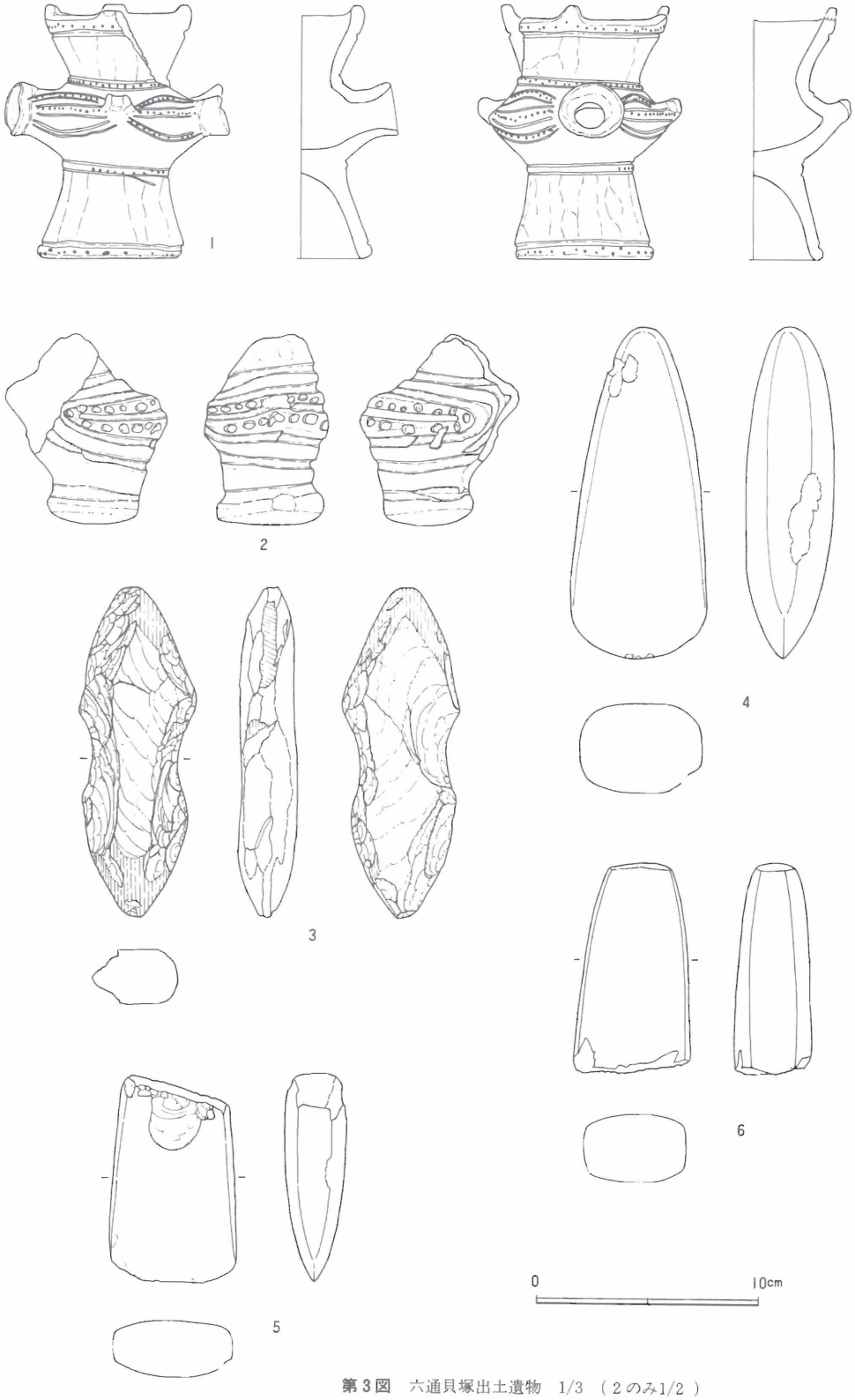
第３図１は，貝塚の開口部にあたり，大金沢支谷に向かう緩やかな斜面の畑から耕作中に発見された異形台付土器である(註16)。口縁部の約半分と，胴部の小突起１つを欠損しているが，ほぼ全体の形を知ることができる。器高11.4cm，推定口径7.5cm，胴部最大巾10.1cm，底径6.6cmを測り，既出の異形台付土器の例からすれば，小型の部類に属するであろう。口唇部の小突起は４単位と思われる。口唇部・台部の下端には，やや太めの沈線がめぐり，先端の鋭い棒状工具で小さな刺突が連続的に施されている。口縁部と胴部，胴部と台部の接合部位には，刺突に用いた棒状工具によると思われる2本の沈線がめぐり，その間に口唇部と同様の刺突が施されている。胴部にはラッパ状の突起と，小突起とが対をなし，突起の間には２本の横走沈線とその上下に向い合う弧線が施されている。沈線の間にはやはり刺突を充填している。胎土はやや粗く，砂粒を若干混入している。焼成はよく外面は淡褐色を呈するが，胴部内面は黒色を呈している。外面の調整はあまり丁寧に行われておらず，沈線を施す前に，口縁部は胴部との接合部位から上へのケズリ，台部は下へのケズリが行われている。縄文は全たく施されていない。外面と台部の内面に赤色顔料が痕跡的に認められ，ほぼ全面にわたり赤彩されていたのではないかと思われる。この異形台付土器の時期は，加曽利ＢⅢ式から安行Ⅰ式にかけての時期と考えられる。

同図２は北東部の畑から今回の調査中に採集された土偶である。脚部と考えられるが，左右のどちらであるのかははっきりしない。深めの沈線が施され，膝にあたる部分に連続する刺突が加えられている。胎土は良好。時期は後期中葉であろう。

同図３は完形の独鈷石である(註17)。長さ14.9cm，巾5.3cm，厚さ2.5cmの偏平なものである。両刃部及び側縁の一部に若干の研磨が施されており製作の途中かとも考えられる。しかし，刃部の研磨は局部的であり，刃部のつくり出しを目的としたものではなく，単に整形のために行った研磨と考えた方がよかろう。抉りは比較的深い。時期的には縄文時代後期の例ではないかと思われ，独鈷石の初期的な形態と考えられる(註18)。

同図４は完形の磨製石斧である(註19)。長さ14.9cm，巾6.2cm，厚さ4.1cmを測る。全面に丁寧な研磨が施されている。刃部は円刃で，使用によるとみられるわずかな剥離が認められる。

同図５は定角式磨製石斧である(註20)。基部を欠損している。残存長9.3cm，巾5.7cm，厚さ2.8cmを測る。全面に丁寧な研磨が施されている。刃部ははじめ円刃であったと思われるが，使用による刃部のつぶれを再度研磨し，刃部を再生していると考えられる。



第3図　六通貝塚出土遺物　1/3　（2のみ1/2）

同図6もまた定角式磨製石斧である(註21)。刃部を欠損している。残存長9.5cm，巾5.3cm，厚さ3.5cmを測る。全面にわたり，丁寧な研磨が行われている。4～6の磨製石斧は時期不明であるが，貝塚の形成時期，すなわち縄文時代後期乃至は晩期に属すると考えられる。

以上の遺物のうち異形台付土器は，本貝塚では2例目である(註22)。内田儀久の集成(註23)によれば千葉県内の出土例が最も多く，1の胴部に施されているような文様を伴う例は，佐倉市井野長割遺跡や成田市殿台，埼玉県桶川市高井東遺跡などから出土している。ただ，これらの例には地文縄文が伴っており，この点で本貝塚の異形台付土器とはやや趣を異にしている。

5．おわりに

六通貝塚は，村田川北岸の貝塚群の中ではその規模と貝層の堆積量において最も大きな貝塚ではないかと思われる。この貝塚群を構成する各貝塚の形成時期は，比較的限られており，中期乃至は後期であり晩期に至るまでの長期間にわたる貝層の形成が推測されるのは，わずかに六通貝塚のみである。前述した様に六通貝塚に近接する小金沢貝塚や木戸作貝塚は堀之内式期に貝層の形成がはじまりほぼその期間に終焉をむかえてしまう。しかし，六通貝塚はこれらの貝塚とほぼ同時期に貝層の形成がはじまったと考えられるが，主体となる加曽利B式期から安行Ⅰ・Ⅱ式期を経て，晩期前半まで継続的に貝層形成が行われたとみられる点で，極めて特異な存在である。村田川北岸に密集する貝塚群の終焉を明らかにする貴重な貝塚として，今後の調査に期待するとともに，充分な保存の対策が講じられることを1人の研究者として望む次第である。

今回のボーリング調査と出土遺物の紹介については小川延孝，小川和子，鈴木廣璋，石川浪雄，鈴木圭子，米田耕之助，石田守一，阪田正一，上守秀明の多くの方々に御教示・御協力を賜わりました。記してお礼申し上げます。

註

1）加部巌夫「古器物見聞の記」『好古雑誌』1882　この中には六通貝塚出土の土偶と石剣が図示されている。

2）高橋健自『考古学』1913　東京帝室博物館蔵の土偶として，六通貝塚出土の土偶2例が写真で紹介されている。ともに縄文時代後期後半の例であろう。なお，1例が「古器物見聞の記」に図示されているものと思われる。

3）伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』1959　この中で小児又は胎児甕棺葬の1例として六通貝塚例があげられる。

4）註3の文献に同じ。

5）杉原荘介『千葉市東南部丘陵地帯遺跡分布調査報告書』1968

6）郷田良一・雨宮龍太郎他『千葉東南部ニュータウン9－六通遺跡・御塚台遺跡－』1980

7）郷田良一・小宮孟他『千葉東南部ニュータウン10－小金沢貝塚－』1982

8）郷田良一・小宮孟他『千葉東南部ニュータウン7－木戸作遺跡第2次－』1979

9）現在，当センターによって調査中である。

10）ここに言う有吉南貝塚は千葉市有吉町字有吉・宮前に所在し，『千葉県の貝塚』（千葉県文化財保護協会1981）では有吉貝塚とされている貝塚である。

11）『千葉県の貝塚』では有吉南貝塚とされている。

12）当センターによる確認調査によって発見され現在その一部が調査中である。貝層は前期黒浜式から諸磯式期にかけて形成したものと思われる。

13）『千葉県の貝塚』では，南側の開口部に地点貝塚が存在すると報告されているが，今回のボーリング調査ではこの部分に土盛がされており未確認である。

14）千葉市教育委員会『千葉市史史料編1』1976

15）米田耕之助「千葉県六通貝塚出土の台付異形土器」『古代』62号　1977

16）発見者の鈴木圭子さんから直接お話を伺った。現在鈴木英夫氏所蔵

17）小川延孝氏所蔵

18）鈴木道之助『図録石器の基礎知識Ⅲ』1981

19）鈴木圭子氏所蔵

20）小川延孝氏所蔵

21）小川延孝氏所蔵

22）註15に同じ

23）内田儀久「異形台付土器論(Ⅱ)」『奈和－15周年記念論文集－』1984

（2班　千葉東南部事務所）